資源環境経済学特別演習Ⅱ　議事録
2017年度　第5回

報告題名(title)：野生鳥獣対策に対する都市住民の協力の誘発手法の開発	
報告者(name)　木暮悠太	**日時**　10月　19日　午後3時～
所属分野(labo)　環境経済学分野	**場所**　第５講義室
座長　石塚	**議事録担当者**　伊藤
出席者　木谷、井元、小山田、米澤、冬木、宮里、伊藤（航）、金鑫、王（竜）、小林、石塚、木暮、辻、格根塔娜、古屋、長尾、熊谷、王（聡）、唐、楊、大山、鄢	

報告要旨(Abstract)

野生鳥獣による農林業被害は毎年200億円前後にのぼり,人身被害も発生するなど,野生鳥獣問題は全国で共通の問題となっている.野生鳥獣対策は,一部の農家や関係者のみで行ったとしても,他の農家や住民が適切な対策を行わなかった場合効果が表れにくく,地域全体としての対策が必要である.さらに今後,野生鳥獣の個体数が増加,生息地が拡大していけば現在被害が発生していない都市部においても野生鳥獣問題が発生することが考えられる.実際に神戸市の都市部ではイノシシによる住環境被害や人身被害等が報告されている.こうした事態を防ぐために,現時点で野生鳥獣問題が発生していない地域においても野生鳥獣問題に対する興味や関心を高め,手遅れになる前に予防策を行うことが重要である.

本研究は直接野生鳥獣問題に関わらない人として都市部住民を想定し,都市部住民の野生鳥獣問題に対する協力行動を誘発することを目的とする.また,野生鳥獣の中で急速に生息域と被害が拡大しているイノシシを対象動物に,イノシシ被害が深刻になることが予想される宮城県仙台市を対象地域とする.

質疑・応答(Q＆A)

① M2 辻

Q：住民向けの質問票における鳥獣被害の対策に関して、「個人で対策をとること」、「町内会や集落のレベルでとること」、「市や県・国で対策をとること」といったように整理した方がわかりやすいのではないか。

A：このスライドでは取り上げていないが、「鳥獣害対策を誰が行うべきか」といった質問は入れる予定である。実際の行動内容と関連して、それを誰が行うかについても訊いてみたいと思う。

②D1 石塚

Q：野生鳥獣による被害防止に使う予算の推移はどうなっているか。

A：推移については把握していないが、増加傾向にはある。農水省が出している平成 30 年度の予算概算要求では 150 億円程度となっている。ただし市町村や県独自の予算もあるため、国全体として行政からどの程度予算が出ているかについては現在手元に資料がない。

③冬木先生

Q：3000 部のアンケートを 18842 世帯にポスティングするに当たって、どう対象を選択するのか。

A：ポスティング業者に依頼する。丁目単位までで配布する数のリクエストができるので、その中でできるだけバラけさせられるようお願いする。

コメント：郵送配布を行うわけだが、「回答しなかった分」＝全く関心のない人も含めた分析枠組みも必要なのではないだろうか。地域の属性によって回答数に差が出たら、それは分析対象になり得る。

④米澤先生

Q：なぜ敢えてタイでゲームをやったのか。タイにイノシシ被害はあるのか。

A：イノシシに類するものはいるが、その被害は表面化していない。なぜタイかという点については、タイの大学の先生からの呼びかけがきっかけになっている。しかし、(タイの学生は)農業とは直接関係ない人たちという点で、ゲームが成立するかどうかの評価対象者として使えないわけではない、と考えている。

⑤井元先生

Q1：野生鳥獣対策を目的として、なぜ都市住民を対象とするのか。鳥獣対策のメインとなる里山・農村地区の住民や対策が見落とされているように感じる。

A1：自分もはじめは農村部に軸足を置いて、そこで役立つ技術的・具体的な話について研究したいという気持ちもあったが、学部 3、4 年のころから鳥獣被害を受けている人たちのもとへ通う中で、そういった(被害に対して危機感を持っている)人たちへのアプローチは、行政や環境コンサルタント、集落点検を行うような専門家がやった方が効果が大きいと考えた。そこで現場で頑張っている人たちに対する後方支援のようなものができないかと考え、都市住民を対象とした。

Q2：色々な問題が他にも多くある中で、都市住民をターゲットにボランティアに来てもらう、そのために講習会をする、というのは飛躍があるのではないか。鳥獣被害は気候変動などといった部分も関わってくるのに、人とのかかわりに注目する意義がわからない。

A2：アンケートでは、現場で頑張っている人たちの商品を買い支える等の行動としての選択肢のオプションを入れている。また実際、農村部の住民がイベントとして都市住民を呼んで対策行動を一緒にやるといったことによりソーシャルキャピタルが増加したという研究がある。

質疑・応答(Q & A)

⑤井元先生(続き)

Q3：それならば、ジビエ料理に対する評価・支払い意志などといった環境評価の手法を用いた方がいいのではないか。調査票の項目やターゲットとする地域など、もう少し検討した方がよいのではないか。

A3：ジビエに関する研究は既に色々なところでやられているので、やられていないことをやってみたいという個人的な思いもある。

Q4：ボランティアは誘発されてやるものだろうか。本当に参加したいという人たちがボランティアに参加するのはいいと思うが、ゲームプレイにより被害を強調・印象づけることで参画を促すといったことに、危うさを感じる。

A4：実際にやる場合は、仙台市の生物多様性推進関連の予算がここ3年で大きいのがついているので、そこでやれたらいいと考えている。どういう位置づけかというと、都市住民はそもそも(鳥獣被害について)「気づいていない」「知らない」というところに対して、知るきっかけを提供するという意味での意義はあるのではないかと考えている。もちろん、それをやった上で「だからどうしたんだ」と思う人もいるだろうし、全員に罠の見回りをしてもらいたいというようにも考えていないが、そういう行動をする人たちの背景にはどういった思いがあるのかといったところを拾ってみたいと考えている。

コメント：人の住んでいる地域に野生鳥獣が出てくるのは一体なぜなのかというところで、人の手入れの部分が非常に強調されていて、そうではない部分(山が荒れている、気候変動、捕食者がいない、など)が欠損している。となると、人の部分だけに対しての都市住民の支援だけを結果として出すのは違和感がある。もう少しそのあたりも図や表で整理し、その中のここをターゲットにしているということを明示するべきなのではないか。